
PARTNER

新山信仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PARTNER

【Nコード】

N5756J

【作者名】

新山信仁

【あらすじ】

中等部3年生ながら有名芸能人で俳優の神山隼人。仕事と学校を上手く両立させ、隼人は高等部へ。そんなある日、隼人は学校へ登校中に同じ高校生の女性に出会う。その出会いが隼人の人生観を大きく変えることに・・・

第1話 出会い（前書き）

初心者なもので、おかしい部分があるでしょうがどうか我慢して読んでいただければ嬉しいです。

第1話 出会い

東京都立黒京高等学校に今をときめかす俳優の神山隼人かみやまはやくが入学した。彼は中学3年で15歳の時にタレントとしてデビューした。

デビュー2ヶ月で人気者になるなど、1年目は大躍進の年だった。整った顔立ちに長髪で茶髪に近い金髪。178センチの高身長。誰もが魅了されるような美男子イケメンだ。

そんな隼人が入学して2週間がたったある日。

登校中、道の曲がり角を曲がった時だった。

隼人は1人の女性と出会った。

女性はあわただしく走っていて、隼人にぶつかった。

「ご、ごめんなさい！」

彼女はすぐに謝った。

「大丈夫です。そっちは大丈夫ですか？」

制服が黒京高校のものだ。黒京の生徒だった。

「大丈夫です。じゃあ急いでるんで行きますね」

彼女は走って行った。

「あれ・・・？学校とは反対だぞ・・・」

そして隼人は学校について。

自分のクラス、1組の教室に入ると隼人の席の横に1つ席が増えていた。

転校生がくるというのだ。

「入学2週間で転向かよ」

「せんせー、転校生って女子ー？」

クラスの男子が先生に疑問をぶつけた。

「ああ、女子だぞ。入ってくれ」

転校生が教室に入った。

「自己紹介でもしてくれ」

「・・・上原結衣うえはらゆいです。よろしく願いします」

肩にかかるくらい、いわゆるセミロングで茶髪の髪に、大きい瞳。そして平均的な身長にスリムな体系。文句なしで可愛いと言える。

「じゃああの席に座ってくれ」

1組担任は隼人の隣の席を指でさして言った。

結衣は自分の席の前まで行った。

「上原さん、よろしくね」

人見知りをしない隼人は結衣のほうを見ず、あいさつをした。

「うん、よろしく・・・あれ？」

「ん？」

結衣が何かに気づく。

隼人は結衣の方を初めて見た。

「あ。朝・・・あったよな」

「う、うん」

結衣は驚いている。

目の前に芸能人がいるというのだ。驚いてもしかたない。

そして何事もなく、1時間目が終了した。

休み時間になるとクラスの女子が結衣の元へ集まってきた。

「結衣っていうんだよね？　びつくりしたでしょー。あの神山隼人がいるなんてね」

「うん、すごいびつくりした」

「ちなみにね、あたし、隼人と小学校、中学校一緒なのよ。大谷加奈っていうの」

加奈は大人っぽい顔立ちで、少し身長は高め。ロングヘアで黒い髪が特徴的。

「へーすごいね」

「すごいでしょ。自慢できるのこれくらいだけだね」

「上原結衣・・・か」

隼人は廊下の窓から空を見上げてそう言った。

第1話 出会い（後書き）

感想お願いします。修正点とか教えてください！

第2話 彼女

結衣が転校してきて、1週間が経った。

だんだんクラスに馴染んできた。

隼人には気になっていたことがあったので結衣に聞いた。

「なあ、上原」

「なに？隼人くん」

結衣は普通に返答したが、隼人には普通に聞こえなかった。

「お前も下の名前で、か・・・」

隼人は有名人だからといって、

なぜかわからないが皆名字ではなく、名前で呼んでくるのだ。

結衣も皆が呼んでいるから名前で呼び始めたらしい。

「で、なあに？」

「お前つてさ、どこから来たの？」

気になっていたとは結衣の出身地だった。

「あたしは北海道から来たよ。でもそこが出身じゃないけどね」

前は北海道に住んでいたが、出身は違うと言う。

「じゃあ出身はどこ？」

「沖縄なの」

結衣はにっこり笑ってそう言った。

笑顔が可愛い女の子とはまさにこの子のことだろう。

「沖縄、北海道、東京つてすげえな」

「へへ、すごいでしょ」

2人は少し仲良くなっていた。

そして放課後になり、隼人は一番仲のいい友達かさはらだいすけの笠原大典と下校していた。

大典はなかなかっこいい顔に黒い長髪。ルックスも悪くない。男

女問わず人気があり、モテている。
隼人と大典は同じクラスの1組。

「隼人ってさ、早川とまだ付き合ってたっけ？」

「ああ、付き合ってるけど」

早川奈々美。黒いショートヘアに可愛い顔。平均より小さい身長だがスタイルは悪くはない。

そう、隼人には早川という彼女がいるのだ。

その彼女とは中学3年の秋から付き合っている。

高校は残念ながら別々になってしまった。

「へー、あっそ。それ聞きたかっただけ」

「なんだよ、それだけか」

夜になった。

隼人はどこにいるかというと、生放送の番組の収録スタジオ。
内容はサプライズゲストとしての出演。

隼人は2週間に1度は学校を休んでテレビやドラマなどの収録をしている。

連続ドラマには最近出演するようになってきた。

そして翌日。

この日は休日で収録もなかった。

隼人は家で暇を持て余していると、早川が家に来た。

「神山くん、話があるの。入っていい？」

「いいよ」

早川が言う話とは・・・？

第3話 失恋

この日は休日。

隼人は仕事の予定も入ってない。

暇を持て余していたところに彼女の早川^{はやかわ}が家にやってきた。

話があるとのことだが何の話だろうか。

とりあえず隼人は家に入ってもらった。

「やっぱり広いね、この家。何度来てもなれないや」

隼人は父親が元々金持ちの為、家も豪邸に住んでいるのだ。

大体庭なども合わせると約1500坪もある。

その父の職業は会社の社長。しかもアメリカにある会社の。

今は本社で仕事している。ということはアメリカに居る。2年前にアメリカに行ったきり、帰ってこない。時々電話などでやり取りはしているようだ。

「で、話って何？」

「あのね……」

すごく言いにくそうにしている。

少し沈黙が続いた。

「ごめんなさい、私と別れてほしいの……」

話とは『別れてほしい』だった。

隼人は予想外だっただけに驚いている。

「なんで…理由はなんだよ」

信じられず、理由を訊いた。

隼人は別れたくない様子だ。

「テレビとか見てたら、なんか…遠い存在に感じてきちゃった……」
早川も隼人も辛そうな表情をしている。

状況に耐えるのが辛くなってきたようだ。

「そうか……わかったよ」

「うん、じゃあ私帰るね……」

早川は出て行った。

それから数分後。

隼人が落ち込んでいると、静かな物音が聞こえた。
人が歩くような物音が。

隼人には誰の音かは見当は付いていた。

コツ、コツ、コツ……

「お兄ちゃん！ たっだいま〜！」

ハイテンションで隼人に飛びついてきた。

「梓、おかえり。今日は何買ったんだ」
あすこ

梓と言うのは隼人の妹。中学2年生だ。ショートヘアで隼人と似たような髪の色。顔は隼人の妹ともあって可愛い顔立ちをしている。

150センチの身長でスタイルは抜群。まさに美少女と呼ぶにふさわしい。

ちなみに梓がハイテンションで帰ってきた時は大抵何かを買った時。隼人は既に何かを買ったとわかっていた。

「ハイヒール買ったの！ かわいいでしょー」

そう言っつて隼人に見せつけてきた。

もうこういうことは何度もあったから隼人はなれている。
だが今日は…

「あつ、ハイヒールってことはさっきの音……」

「うん、そうだよ〜」

さっきの『コツコツ』という音は梓がハイヒールを履いて歩いていた音だった。

「おいおい…また怒られるぞ」

この家は家政婦を3人雇っている。
料理人も2人。

「それよりお兄ちゃんなんでそんなにテンション低いの？」

いや、明らかに梓のテンションが高すぎるだけだが、隼人もいつもとは少し様子が違うのは確かだ。

隼人はフラれたことを話した。

流石にショックだったのだ。

フラれるなど思っていなかっただけに。

「早く立ち直らないと駄目だよ？」

と言われて隼人は翌日から元気になった。

そう、神山隼人は芸能人。こんなことでくじけてはいられない――

第3話 失恋（後書き）

妹登場。

第4話 撮影

「隼人君、ドラマの依頼来たよ」

隼人にとつて、初主演のドラマの依頼が来たとマネージャーから伝えられた。

マネージャーとは、おはなやすたか尾花康隆という者だ。

金髪でやや長髪。イケメンでもブサイクでもない顔で身長は高く、185センチもある。外見だけ見れば、付き合いたいという女性は少なくないだろう。

「康隆くん、俺今乗り気じゃないんだけどさ……」

隼人が低テンションで話した。

「ええっ！ 今からCMの撮影なのにどうするの！」

康隆はどうしてもというように元気を出してもらおうと必死だ。

結局、CMの撮影現場に来た。

撮影現場に着くや否や、隼人がさつきとは別人のようなテンションになっていた。

「よろしくお願ひしま〜す！」

「…忘れてた。いつもこうなんだよな…」

そう、隼人はいつも仕事現場に来ると上機嫌になるのだ。

「おっ、CM王子来たね〜」

隼人は世間で『CM王子』という愛称で呼ばれている。

元々CMからデビューして、そこから問い合わせが殺到。そして有名になって今に至る。

最近ではドラマにも脇役として出演し始めた。演技がとてまうまくて、名脇役という称号もついた。

そして何事もなく、無事に撮影は終了した。

「これでまた学校で騒がれるでしょ」

康隆に言われた。

「ドラマなんかのほうがもっと騒がれるよ」

これくらいで大騒ぎするほど子供ではないと隼人は踏んでいた。

第4話 撮影（後書き）

ハリーポッター読んで勉強しました（、・ω・、）

第5話 疑問（前書き）

5話突破

第5話 疑問

「隼人くん、おはよう」

隼人は学校に登校して、自分のクラスに入るときに結衣に声をかけられた。

「おはよう」

朝は苦手な為、若干目が覚めきつてなくトーンの低い声で返答した。そのまま結衣が近づいて来て、話が続いた。

「ねえねえ、CM見たよ」

「ああ、ありがと」

以前撮影したCMが放送されたのだ。それを見てた結衣は報告してきた。

「あつ、あたしも見た！カッコよかった」

1人女子が話に入ってくると、続々と何人も来た。

隼人はまさか・・・と思った。

嫌な予感がした。いや、嫌な予感しかない。

たちまち、結衣の周りには大勢の女子が集まって隼人の新しいCMの話を始めた。

嫌な予感が的中した。

ガキじゃあるまいし・・・と思ったが、少しうれしい気持ちがあった。

翌日、隼人は普通に学校に来た。

1時限目が始まったが、結衣はまだ学校に来ていない。
遅刻か休みか、どっちだろうか。

3時限目が始まった当たりで授業中に結衣が学校に来た。

「上原、遅かったな。まあ席に着け」

席に着こうとしたら隼人に話しかけられた。

「どうして遅刻したの？」

「ちよつと病院行つてたの」

そう言つて、結衣は椅子に座った。

「なんで？」

病院に行つていた理由を訊いた。

「……風邪っぽいから行つてたの」

間があいた。

「そっか」

少し様子がおかしいと隼人は疑問に思った。

何だろう・・・と気になったが「ほんとに？」とは訊かなかった。

もし訊いて、何かの病気だったら隠してる本人に悪い、傷つけてしまひそうと思つたからだ。

結衣は何かの病気なのだろうか……？

第6話 母親（前書き）

久々の投稿・・・誰か評価してくれ〜！
w

第6話 母親

ある日、学校は終わって、結衣は隼人と小学校・中学校からずっと一緒に学校という加奈と下校していた。

「加奈ちゃんって、隼人とどういう関係なの？」

結衣が訊いた。

前々から疑問に思っていたらしい。

「友達よ。でも一時期付き合ってたんだけどね」

「えっ、そうなの？」

あの人気俳優と付き合ってたと聞いて驚いている。

「でもね、1ヶ月くらいで別れちゃったわ。「お前は彼女って感じでは接しられない。友達に戻ってほしい」って言われてね」

「へえ・・・」

隼人は加奈を“彼女”ではなく“友達”としてのほうが接しやすいらしい。

それが理由で別れた。

2人が付き合っていたのは中2の頃。

つまり、まだ隼人はデビューしていない頃だった。

「そんなことよりさ、隼人のことどう思ってたんの？」

加奈は「好きなの？」と言わんばかりに訊いてきた。

「別に・・・普通にかっこいいと思うし、一緒に話してて楽しいよ」
どうやら、好きではない模様。
好き、というより友達という感じだ。

そのまま結衣の家の前まで来た。
去って行こうとした結衣だが加奈は止めた。

「あ、結衣、隼人には絶対に母親のこと訊いちゃダメよ。あいつ小さいときに母親なくしてるから」
「・・・そうなんだ。わかった」

加奈は別れ際に注意した。

隼人は3歳の時に交通事故で母親を亡くしている。
結構なお母さんっ子。
葬式から2週間ほどはほとんど口を利けなかった。

結衣と加奈は「じゃあね」と言って別れた。

翌日。

結衣は隼人をこっそりと誰にも見つからず連れて行った。
話したいことがあるという。

「隼人くんって・・・お母さん亡くしてるんだね・・・」
その言葉を聞いた途端、隼人の表情が曇った。

「・・・そうだよ。3歳の時にな」

「あたしも・・・5歳でお母さん死んでる」

そう。結衣も5歳の時に交通事故で母を亡くしていた。

「そうなのか」

隼人は先ほどまで元気だったのに、母の話になってから一気に元気が無くなった。

結衣が話したいことは自分の母も他界しているということだけではなかった・・・。

第7話 特待生

「…あたし特待生なんだよ。知ってた？」

結衣はとっさに「この話はまずい」と思ったのか、話を変えてきた。いつか結衣は特待生だ。

家の事情もあつて、特待生として転校してきた。

「知ってる。福井（担任の先生）が言ってたよ」

話が変わると、隼人は少し元気を取り戻した。

黒京高等学校（こくきょうこう）の学力での特待生は学年1位になれば学費全額免除だ。結衣は特待生だが隼人の頭がよすぎるということもあつて、学年2位でも学費全額免除と言われている。

ちなみに隼人は中学の時に満点を達成している。だから結衣は「2位でもいい」のだ。

でも隼人は特待生ではない。

神山家のほうから特待生は断っていた。理由は学校を休むことが多いからだ。

2人は屋上で話をしていたら車のクラクションの音が聞こえた。

「あ、ゴメン。俺仕事だからもう行くよ」

このクラクションは「仕事だから降りてこい」とのマナージャーの合図だ。

「うん。今日は1時間も授業出られないんだね」

「ああ、上原に顔見せて、ちよつと話したただけだったな。じゃあな」

そう言うと、隼人は屋上から出て行った。

結衣は屋上から車を見下ろしていた。

隼人が乗り込むときに、偶然上を見て、結衣が下を見てることに気付いた。

手を振った。

「隼人くんって皆に大してああなのかな…?」

1時限目が始まる合図のチャイムになると、結衣は教室へ戻った。

その頃隼人は当然、車の中で移動中。

「移動何分ぐらい?」

「まあ、15分ぐらいかな」

隼人は、できるだけ周りには心配かけたくないという性格なので、すっかり元気は戻っていた。

だが……

「康隆くん、母親がいる感覚ってどんな感じ……?」

「は、隼人くん…?」

いきなり、彼のデリケートな所を自分から訊いてきて、尾花は驚いている。

驚くのも無理はないだろう。

「俺って3歳で亡くしてるから全然わかんねーしさ、正直皆を見るとうらやましかったりする……」

内心を打ち明けた。

「何言ってるの…君と同じような人間は世界に何人だっている。大丈夫だよ」

「…ありがとう…」

「ありがとう」の後、隼人は微笑んだ。

隼人は今まで耐えてきた。苦しんだ。今になって、くじけることはできない、と思ったのだらう。

第8話 ゴールデンウィーク

5月になって、今はゴールデンウィーク。
隼人は5日間仕事漬けだ。

その仕事に向かうため、移動の車の中。

「ハア…ゴールデンウィーク1日も休めないのかよ…」
「仕方ないよ。隼人君は今すごい人気あるんだからね」

窓の外を見てため息をつく隼人。

5日間休みがない上、睡眠時間がすごく少ない。
マネージャーの尾花が調子に乗りすぎたのだ。

ドラマの撮影や、番組の収録。

年末年始並みに忙しくなっている隼人。

睡眠はあまりとれず、移動中が睡眠時間と化している。

順調に仕事をこなしていくが、疲労はどんどんたまる。
家にはほとんど帰ってない。

ゴールデンウィーク最終日。

ドラマの撮影中。

「……？」

セリフが出てこない。

隼人は少し意識がもうろうとしてきた。

「隼人君？ どうしたの？」

共演者に心配され、声を掛けられた。

その時だった。

隼人が倒れた。

マネージャーの尾花はあわてて隼人のもとに駆け寄った。

「隼人君！？ 大丈夫！？」

声を掛けても意識は戻らない。

意識が戻った時、隼人は病院のベッドの上にいた。

「ちょっと…無理しすぎたかな…」

「そうだね…ごめんね」

疲労はピークに達していて、それでも仕事を続けたのが原因だ。

「しばらく休んでいいよ。働きすぎだよ」

とりあえず、疲れがとれるまで休め。ということだ。

「疲れが取れたらすぐ復帰するよ」

「うん。じゃあ俺は帰るよ。梓ちゃん呼んだからね」

尾花は隼人の家へと帰った。

そのすれ違いのように、10分後梓が病院へ来た。

「お兄ちゃん大丈夫？ 尾花さんから聞いた時びっくりしたよ」

「大丈夫だよ。倒れただけ。すぐ家帰れるよ」

隼人の退院は5日後。

隼人自身は5日間も入院しなくていいと言ったが、病院側から大事をとって、5日間にしたのだ。

次の日。

尾花が隼人の見舞いにきた。

「康隆くん、ちょっとブラブラしてきていいか？」

「うん・・・まあ、ちょっとだけならいいんじゃない？」

「ありがとう」

隼人は「暇だから」と病院の中をブラブラし始めた。

歩いていると、見覚えのある後姿を見かけた。

第8話 ゴールデンウィーク（後書き）

投稿遅れてスマソ

話を考えるのに手間取ってました。

是非評価してくださいm(_____)m

コメントもうれしいけど評価のほう嬉しいかもw

第9話 疑問の真相

見覚えのある後姿を見かけた。

「もしや」と思い、隼人は声をかけた。

「上原―」

“見覚えのある人物”は振り向いた。

「あれっ？ 隼人くん？」

「やっぱりな」

その人物とは結衣だった。

2人とも訊きたいだろう。

なんでここにいるのか。

先に結衣のほうに訊いてきた。

「まあ、かくかくしかじか……」

隼人は事情を話した。

「上原こそなんでここに？」

前から抱いていた疑問の真相が明らかになる時がきた。

「……お父さんが入院してて……」

そう。

結衣が病院にいるのは父が入院しているからだ。以前学校を遅刻したのは、父の容体が悪化して、医者から話を聞いていたから。

「そつか。で、父さん大丈夫なのか？」

「うん。今は元気だよ」

結衣はうつむいて微笑んだ。

「あ、神山さん。さっき意識戻ったところなのに立ち歩いちゃ駄目ですよ」

隼人が担当医師に見つかった。

無断で歩いていたので、すぐに部屋に戻るよう言われた。

「じゃあな、そのうち上原の父さんのところ見舞い行くよ」

「ありがと」

隼人は部屋に戻った。

第9話 疑問の真相（後書き）

ちよつと短め・・・

第10話 退院（前書き）

サブタイトルがイマイチ「良いサブタイトル」にならない^^；
そこらへん成長せねば笑

第10話 退院

隼人が貧血で倒れた日の翌日。

新聞の片端にそのことが取り上げられた。

テレビでもニュースになっている。

病院で入院している隼人。

朝起きたら妹の梓がいた。

「あ、お兄ちゃん。おはよう」

満面の笑みであいさつ。

昨日見舞いに来て、その日は隼人の病室（個室）で寝た。

「ああ、おはよう……ってあれ？ お前学校は？」

もう授業が始まる頃の9時だ。

「もー、創立記念で休みって言ってたでしょー」

梓の中学は創立記念日として休み。

だから先日、病院で寝たのだ。

4日後。

予定通り隼人は退院した。

翌日からは仕事に復帰し、学校へも行った。

季節は夏へ。

6月某日。

朝学活が始まる直前に隼人が教室へ着いた。

「隼人、遅いわよ。もうちよつと早く来なさいよ」

結衣と話していた加奈が注意した。

「朝は苦手なんだよ。知ってるだろ」

隼人は家を出るギリギリに起きて、支度をすますと朝食は食べずに車で登校する。

そして朝食は車で食べる。

以前（1話参照）、徒歩で登校していたが、それは隼人が「電車に乗りたくない」と言ったのでその日は車ではなく電車で登校したのだ。

「あ、前から気になってたんだけどさ、上原中間何点だった？」

隼人は「受けるのは期末だけでもいい」と学校側から許可をもらっているので中間テストは受けていない。

そのため、隼人は特待生である結衣の点数を知らない。

「484点だよー。隼人くん受けてないから首席」

笑顔で答えた。

「へえ。期末ではそれ越してやるよ」

宣言した隼人。

宣言通りなるか？

番外編 part 1 上原結衣（前書き）

番外編 part 1 です。
主役は結衣です。

番外編 part 1 上原結衣

あたしは上原結衣。

5歳のときにお母さんが死んじゃった。

その時、死に際に「いっぱい勉強して偉くなりなさい」って言われたの。

だからあたしは寝る間も惜しんで勉強した。

そして高校受験で北海道で一番頭がいいといわれる高校に特待生として受かった。

あたしの家はもともと貧乏で、親は共働き。

だからお母さんが死んで、うちは一気に貧乏になった。

高校入学から1週間が経って、お父さんから知らせが入る。

「せっかく高校受かって申し訳ないが……転勤することになった」
「せっかく勉強頑張って高校受かったのに、転勤なんて……」。

そう心に言い聞かせて、自分を納得させた。

4月13日。

明日は引越す。

その場所は東京。

東京の黒京高等学校という高校に転校する。

黒京はあたしが受験したところには及ばないけど、学力は東京の高校の5位以内に入るらしい。

「結衣……また絶対逢おうね……」

中学の時から仲の良かった親友を合わせて5人の友達とお別れ会。
あたしのために泣いてくれた。

「じゃあね……」

友達に別れを告げ、お父さんと東京へ。

4月15日に黒京高校へ初めて登校する。

登校中、ふと気がついた。

「あつ！ やつぱり……！」

筆記用具一式家に忘れてきた。

どうしよう……まだ今なら間に合うかも……。

初日から

「シャーペン忘れたから貸して」

なんてとても言えないよ……。

あたしは走って家に戻った。

その途中だった。

十字の曲がり角をまっすぐ走り進むと、その曲がり角の真ん中で誰かにぶつかった。

「ご、ごめんなさい！」

「大丈夫です。そっちは大丈夫ですか？」

あれ？ この人……どこかで見たことあるような……。

……はっ、こんなことしてる場合じゃない！

「大丈夫です。じゃあ急いでるんで行きますね」

急がないと……。

急いだ結果ギリギリ間に合った。

疲れてる中、転入してきたので自己紹介を行った。
まあ、名前言うくらいだけど……。

「…上原結衣です。よろしく願います」

第11話 帰り道の出来事（前書き）

今回から1話1話を長くします^^；
あとサブタイトルも深く考えます

第11話 帰り道の出来事

「お兄ちゃん知ってる？ この頃、発砲事件がこころへんでよく起きてるらしいよ」

梓が兄の隼人に話しかけた。

6月に入ってから、発砲事件や、暴力事件が相次いでいるという。

「へえ。犯人は？」

「そんなのわかんないよ。でも1人じゃなくて何人かいるんだってー」

物騒な事件が起きている。

気をつけないといけないだろう。

6月下旬。

学校も6時限目まで終わり、隼人は部活に入っていないので家に帰っていた。

いつもなら康隆が車で迎えに来るのだが、今日は来ない。

仕方ないから隼人は歩いて帰ることにした。

結衣が1人で前を歩いていたので声をかけた。

「上原」

すると、すぐに結衣は振り向いた。

「隼人くん。今日は車じゃないの？」

「ああ、迎えが来なくてな。仕事もないし歩いて帰ることにしたよ」

帰り道の方が一緒なので、いつの間にか2人は一緒に下校していた。

歩き始めて15分ほど経つといつもなら人通りの多い道に出た。だが今日は人通りは少ないどころか、1人といない。

その道には隼人と結衣しかいない。

「おかしいな……いつもならもつと人が……」

2人はいやな予感しかしていない。

「誰も近寄るんじゃない！」

どこから声がした。

「隼人くん、あっちからだよ！」

「行ってみよう！」

2人は声のした方向へ向かった。

2人の向かった先には人が円を作るように集まっていた。

その円の中で1人の男が女性を人質に取っていた。

男はナイフを持っていて、ナイフを女性に突きつけている。

「ちよつと待っていてくれ。先行つてもいいけど」

「えっ？ 駄目だよ。危ないもん」

別に付きあってもない

同じクラスの席が隣同士の男女だが、普通に「はい、行つてらっしゃい」と行かせるわけがない。

「大丈夫。俺、合気道と空手やってたから」

そう言い残し、鞆を置いて隼人は円の中に入つて行つた。

「……あの、もうやめませんか？ なにがあつたのか知りませんけど」

「ああ？ なんだてめえ……」

相手の男はキレてきた。

「俺？ まあ、この中にも俺のこと見たことある人は結構いる。って感じかな」

相手の顔色が変わってきて、隼人は薄々やばいと感じ始めている。「フン、まあいい。こいつはなあ、浮気しやがったんだよ！」
女性は男の妻で、その妻が浮気をしていて、それでナイフを向けているわけだ。

浮気程度でこんなことする男は相当馬鹿らしい。

「ハア……くだらねえ」

「んだと……！ この……」

隼人は馬鹿馬鹿しくなって挑発したその時、男がナイフをこっちに向け、走ってきた。
相手に合わせて隼人は相手の腕を持つ。

そして瞬時に背負い投げを魅せた。

相手は背が地面に着き、ある程度のダメージは受けたが、立ち上がりまた向かってくる。

「あああああ！」

冷静さを失っている。

隼人は合気道の技、相手の腕を返して手首と肘と肩を極めて倒す、一教をかけた。

丁度、捕まえたところに警察が駆けつけた。

「あ、ありがとうございます。迷惑をかけてすみません」

申し訳なさそうに謝られた。

「いえいえ、あなたを助けたのも俺の判断だし、謝られたら困ります」

「そうですか……」

「ええ、それじゃ」

あとは警察に任せて、結衣のところに向かった。

「隼人くんすごかったよ。強いんだね」

「だから大丈夫って言っただろ」

結衣は隼人に鞆を手渡した。

2人は歩きながら話した。

「どうしてさっき助けたの？」

疑問をぶつける結衣。

あの状況で助けに入るのは相当度胸がいる。

「あんなの見過ぎすわけにはいかないよ。少なくとも俺はあーゆーのに遭遇したら助ける」

結衣は自然と笑顔になった。

翌日。

前日、隼人が女性を人質にとっていた男性を捕まえたことがテレビでニュースになった。

そのことも含めた取材も受けることになった。

「隼人くん、昨日はすごかったね」

毎度の如く、隼人は朝ギリギリの時間に教室についた。

教室のドアを開けたら1人の女子が話しかけてきた。

隼人はこの女子の名前が出てこない…というか顔も始めてみる気がする。

「あ、えつと……」

その時、後ろから頭を鞆で叩かれた。

「バカ、俺の彼女だ」

「大典……あ、お前の言つてた子つてこの子か―」
だいすけ

以前、大典に彼女ができたことを教えられていた。
その彼女が目の前にいる女子。

彼女の容姿はセミショートの黒めの茶髪に大きく、くりくりした目。
身長はやや小さめ。大体の人は『かわいい』と思うような見た目だ。

「あ、大くんおはよう」

「ああ、おはよう」

あいさつを笑顔でされ、大典もさわやかな笑顔で返す。

「ん、それで、昨日見てたの？」

話がそれていたので戻す隼人。

「あつ、そうそう。あのとき私もあそこ居たんだよ。かつこよかつた」

「おいおい、浮気か？」

前日隼人が女性を助けたことを思い出している彼女に、大典は少し
笑い気味に言つた。

第11話 帰り道の出来事（後書き）

大典久々登場。

大典の彼女登場。

名前まだ伏せててすみません^^；

この回は力入れたかったんで、更新遅れました。すみません。
んで、変な終わりがた（？）すみませんw

第12話 隼人の人気は異常（前書き）

久々です。

これから1000文字以上を目標に頑張ります。

第12話 隼人の人気は異常

6月下旬。

とある倉庫内。

「兄貴……マジかよ……」

前日、隼人がある男に捕まっていた女性を助けた。

その男女は夫婦で、男のは「妻が浮気している」と勘違いして妻にナイフを突き付けていた。

「神山隼人……次のターゲットはこいつだ」

「よう、上原」

学校で結衣に話し掛ける隼人。

「あ、隼人くん。おはよ」

「昨日の男は逮捕されたらしいぞ。例の殺人事件の犯人だったとか……」

隼人が捕まえた男は6月から相次いでいた殺人事件の犯人だったのだ。

「ホントに？　じゃあ隼人くん大手柄だね」

結衣はかわいい顔でにこつと笑って言う。

回りの男子はその笑顔を見てデレツとした表情になった。

「俺はそういうのあんま気にしねーけどな。メリットがあるうが、なかるうが俺はあういう場面では動くよ」

その台詞を聞いていた教室の女子がドキツとした。

そう、2人は美男美女。

異性からも同性からもモテるのだ。

翌日。

加奈が8時20分に学校かとの教室に着いた。

「な、なによこれ……」

教室の光景をみて思わず驚いた。

なにせ隼人が椅子に座っていて、その前に女子の行列があつた。

「ねえ、なんなの？ これ」

近くにいた男子に聞いた。

「神山と話したいからって並んでるんだってよ。いいよな……あいつはモテてさ」

「あいつほどモテるのは大変よ。人気くらいがちょうどいいのよ」

その日の昼。

食堂で大典の彼女と加奈が食事を取っていた。

そこに偶然、隼人が通り掛かった。

「あ、隼人くん隼人くん、一緒に食べようよ！」

大典の彼女に誘われた。

「ん、いいけど」

「ちよつと、朝のあれなんなの？」

加奈が朝隼人の前に女子の行列が出来ていたのはなんなのか聞いた。

「なんか俺と話したいからってみんな並んでたんだ。結構楽しかったよ。ホストみたいでさ」

少し笑い気味に言った。

ちなみにこの学校、黒京高等学校は主に金持ちの生徒が集まる金持ち学校。

だから食堂でも高級レストランであるようなメニューばかりある。

そのため、結衣には到底食堂のものなど頼めないので毎日弁当を持参する。

「あつ、神山くんよ」

遠くから女子の声がした。

隼人のいる方向を指差している。

今隼人のことを指差したのは高等部3年生の春日千春。かすがちはる

如何にも明るいお嬢様という雰囲気漂っている。

「庶民で特待生の方がいらっしゃるんですって？ どこにいるのかしら」

春日が隼人に話し掛けた。

「春日さんどうも。上原なら……どこだろう。わかりません。すみません」

「いいわよ。行きましたよ」

春日は去って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5756j/>

PARTNER

2010年10月8日22時34分発行